台大日本語文研究第 5 期
2003 年 12 月，頁 113～132

日語動詞分類及其限界性

薛 芸如*

摘　要

動詞的限界性受到學界對動貌的多方討論而爲學者所青睞，近年來對事象結構的研究可謂百家爭鳴即可見一斑。本文將先引介 Vendler 所提出四種動詞分類，可看出動詞的限界性不完全源於動詞本身，而應該由動詞組著眼，如完成動詞即爲一明顯的例子。

因此，我將循北原(1999)的角度針對出現通常具有「途徑」、「客體」的語意角色的賓位的動詞組，觀察動詞組的限界性。 其次，我將審視三原(2002)所論及限制詞有論元限制詞與附加限制詞之說。接著我將就北原所提的部分與三原所提之附加限制詞，依述語動詞具有限界性與否，再加以細分發現，當動詞本身即具限界性(lexically telic)時，內元爲「定指」(specific)，表示「範圍」(或「距離」)的介詞組「マデ」、「次數」，對具界限性動詞組的都是附加語；而動詞本身不具界限性，而是在句法上的動詞組顯示界限性(syntactically telic)者，表示「範圍」(或「距離」)的介詞組「マデ」者，則在最底層的動詞組內，經過重新分析而讓動詞組具有界限性。「次數」與「期間デ」詞組則不論述語動詞是否具有限界性，都是界限性動詞組的附加語。

這三者之間也有其句法結構上的階層性，從與賓位名詞組的關係可以看出「範圍」(或「距離」)在結構樹上低於「次數」，「期間」介詞組則附加於較高的動詞組之外，即「範圍」(或「距離」)<「次數」<「期間」介詞組。這也同時解釋這些量詞組與動詞組同時出現時的位置。

關鍵詞：限界性、論元限制詞、附加限制詞、泛指、定指

臺灣大學學術期刊資料庫

*元智大學應用外語系 講師

Verb Types and Telicity in Japanese

Hsueh, Yun-Ju*

Abstract

Telicity of verb is the topic aspired by discussions of aspectuality, which has led many researchers to focus on event structure recently. This article will begin with the four types of verb postulated by Vendler which implies that telicity is not only originated in verb itself but also the verb phrase; for example, the accomplishment verb.

I shall focus on the telicity of verb phrase, especially on active verb taking accusative argument bearing semantic roles such as [path] and [theme], along Kitahara's track(1999). Then I shall take a view on Mihara's argumentation in which two types of syntactic elements are assumed to bear aspectual delimitedness; i.e., argument delimiters and adjunct delimiters. Further, I would like to postulate the hierarchy of adjunct delimiters by incorporating the ideas of Kitahara's and Mihara's such that quantifiers are adjuncts to lexically telic verb phrase, in which the internal argument NP is specific. However, the quantifier to express "domain", either in countable distance or "made"PP, will be reanalyzed with VP as syntactically telic VP, if it merges with VP.

The hierarchy can also be validly proved in terms of the noun phrase. The "domain" which holds sisterhood with NP, if the accusative noun is generic, is lower than "times" the adjunct to VP. The "duration" is by no means the highest adjunct to the higher VP.

Keywords: telicity, argument delimiter, adjunct delimiter, generic, specific

* Lecturer at Department of Foreign Languages and Applied Linguistics, Yuan-Ze University

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語動詞構文の限界性

薛 芸如*

要旨

動詞の限界性はアスペクトに関する沢山の論説につれ盛んになり、特に最近事象構造に関する研究は著しい。、本文はまず Vendler が提出した四タイプの動詞分類を始め、限界性は動詞自体のみならず、寧ろ完成動詞を一例とする動詞句が決めることを示唆されるところから入る。

本文は北原(1999)の説に沿って経路／客体の意味役割を担う対格名詞句を含める動詞句の限界性に焦点を絞り、そして三原(2002)によって提出された項限定詞と付加限定詞の説を検証してから、その付加限定詞に階層性を持つことを提起する。即ち語彙的限界動詞の内項は特定的であり、数量詞は付加詞と見られる一方、統語的限界動詞句の場合「範囲」数量詞(終点か距離)は名詞句と merge し、限界性を上に浸透する。

又、内項名詞句との関係でその階層性も検証できる。「範囲」数量詞は樹形図では「回数」より低く、「期間デ」は何れの動詞句構造においても上の VP に付加することによって「範囲」＜「回数」＜「期間デ」の階層性が見られる。限定詞それぞれ生起の位置は NP に近い位置から、VP の領域に入る位置へということがわかる。

キーワード：限界性、項限定詞、付加限定詞、全体的、特定的

*元智大学応用外国語学科講師

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語動詞構文の限界性

薛 芸如

一、序論

日本語動詞の分類は形態的に子音動詞と母音動詞に分け、統語的に助詞「を」との共起で他動詞と自動詞に双分けするが、ただし自動詞と他動詞の典型的な分け方に基づいたら説明しきれず、また非対格動詞(unaccusative verb)・非能格動詞(unergative verb)が盛んに論説されている実況を踏まえれば、意味上で一層掘り下げる余地があると言える。

又、統語的に動詞を区別する一方、意味から区別する場合アスペクト的要素を取り入れる考え方もある。つまり動作に起点・経過・終点を含む、いわゆる限界性のことに視点を据え、動詞自体をアスペクト的に分類する語彙的限界性(lexical telicity; aktionsart)ほか項と共起した動詞句、または付加詞と共起した動詞構文に基づく統語的限界性(syntactical telicity)で分類するほうが実態を掴める。特に統語的限界性に関して、項と共起して限界性が持つ動詞もあれば付加詞が付加してから限界性を持つものもある。本論は Vendler(1967)に提出された四つの動詞分類、状態動詞(State)・活動動詞(Activity)・完成動詞(Accomplishment)と到達動詞(Achievement)を基盤に、該当テキストに羅列された動詞を分類する糸口として、北原(1999)の説における対格名詞句と共起する動詞句に対する考察を行い、三原（2002）に提出された動詞句構造を参考にしながら、動詞の限界性を決める要素を考察していきたい。

二、構造における動詞の分類：他動詞・非能格動詞・非対格動詞

従来自動詞と他動詞を区別するとき、格助詞「を」との共起で判

臺灣大學學術期刊資料庫

断する。その自他動詞を区別するには受動文が一つの手がかりで、他動詞は直接目的語が受動文の主語となり、自動詞は主語が付加詞になって、さらに項が一つ増える。しかも能動文の主語が受動文において「に」格で表示されるのは外項である。なお、目的語をあらわす「を」格と共起する動詞しか直接受身に書き換えなく、起点や経路など意味を表す「を」格と共起する動詞の受身表現は直接受身の類に入るというよりむしろ間接受身に近いと思う[1/2]。

(1)a.先生が私を誉めました。

b.私は先生に誉められました。

(2)a.隣の人が私の足を踏みました。

b.私は隣の人に足を踏まれました。

(3)a.猫が美智子が掃除した部屋を汚しました。

b.美智子は猫に掃除した部屋を汚されました。

(4)a.雨が降りました。困りました。

b.雨に降られて、困りました。

(5)a.正一があの山を登って、隣の村へ向かいました。

b.*正一にあの山に登られました。

一方、従来の分け方と違って自動詞を非能格動詞と非対格動詞に分けることもある。主語が動詞の外項の場合は非能格動詞であり、動詞の内項の場合は非対格動詞である。使役受動文になるかはその違いを示している。

(6)a.子供が働く。

---

[1] また、名詞と動詞が複合した複合動詞で、僅かながら編入現象が見られたのは「を」・「が」・「に」限られ、しかも文段階で構造格に相当した項が編入される例が見られる。「を」格がつく経路(Path)や出発点(Source)をあらわす意味項の編入がまだ発見されていない(薛:1991)。一方数量詞が項のみ修飾することからみれば、経路などの「を」格に表示された名詞句はそれが許されるため、項であると言えよう。例:「運動場を二周走った」。他動詞を分析することは本稿ではこれ以上触れないことにする。

[2] 他動能動文の目的語が受動文の主語になるか、元の位置にあるかによって、直接受動文と間接受動文の違いがある。
a.花壇に花の種を植えた。
b.花壇に花の種が植えられた。(直接)
c.くだらない木を庭一面に植えられた。(間接)

臺灣大學學術期刊資料庫

b.子供が働かせられた。

(7)a.料理ができる。

b.*料理をできらせる。

(8)a.お腹がすく。

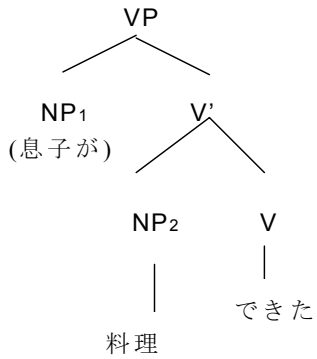
b.*お腹が空かせられる。

上の例文を見て、使役受身文が成り立つ場合主語が外項の場合は使役文が文法的で、内項の場合は使役受身文が非文となることが分かる。

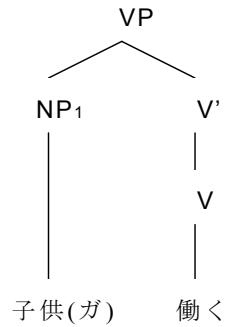
非対格動詞か非能格動詞か、それぞれの枝分かれの構図は次のようになる。

(9)

a. 非対格動詞



b. 非能格動詞



即ち、主語に該当する名詞句が意図を持つかどうかで判断するのでなく、外項に該当するか、内項に該当するかによって、非能格動詞と非対格動詞に区別する。

三、動詞の限界性に基づく動詞の分類

上述したように自動詞は統語的に非能格・非対格動詞に分けられ、従来の自･他動詞の不足を補った。それはアスペクト上では違う構文がある実態を考えれば統語的な分類するほか意味的な視点を取りいれる必要もあろう。動詞より動詞句に対するアスペクト的に分

臺灣人學學術期刊資料庫

析する場合、もっとも広範に援用されるのはVendlerの分類であり、四つのタイプは活動、状態、完成と到達に分かれた。まず動詞の状態性([±state])を基として状態動詞と非状態動詞[3]を分け、それから非状態動詞の限界性([±telic])に基づき活動動詞と完成動詞・到達動詞に分けた。

Vendlerによれば継続的時制(continuous tense)の無い動詞は状態動詞であり、ある場合は活動動詞と完成動詞のグループに入る。活動動詞と完成動詞を分ける際に'for 時間数量詞；for half an hour'は活動動詞と共起し、'in 時間数量詞；in twenty seconds'は完成動詞と共起する。そして文構造において解釈は違うが、もう一つ'in 時間数量詞；in twenty minutes'と共起するのは到達動詞であり、`stop'の補部に生じるのは完成動詞であり、生じないのは到達動詞である。

(10)a. He knows the answer.

彼は答えを知っている。[状態]

b. John is pushing a cart for half an hour.

ジョンはカートを一時間押している。[活動]

c. He drew a circle in twenty seconds.

彼は20秒で一つの円を描いた。[完成]

d. He stopped drawing a circle.

彼は一つの円を描くのを止めた。

e. I reached the top in three hours.

私は3時間で頂上に着いた。[到達]

f.* I stopped reaching the top.

*私は頂上に着くことを止めた。

Vendlerが提出した説を概要にまとめて次の通りになる(中村, 2000:123)。

[3]久野暲(1973)によれば［+状態的］動詞が目的語を取る際は、目的格を表す助詞として「が」が用いられると述べられている。但しここでは北原(1999)の説をもとに、開始、展開、終了というアスペクチュアルな分割ができない動詞にする。

臺灣大學學術期刊資料庫

(11)

	habitual	in an hour	stop
状態動詞	No	No	Yes
活動動詞	Yes	No	Yes
完成動詞	Yes	Yes	Yes
到達動詞	Yes	Yes	No

ここで一つ指摘しておきたいのは、同じ現在式であっても、習慣をあらわすことが許され、進行形であっても動作の継続や反復など、解釈が違うということである。例えば(10)c の'draw'(描く)は活動動詞にも関わらず、'a circle'(一つの円)と共起した場合、完成動詞と解釈される。それに該当する日本語動詞「描く」にも同じ統語現象が見られる。Vendler が動詞のタイプには限界的(telic)・非限界的(atelic)などのアスペクトの特徴があると提起し、こういう性質は動詞句(VP)また文のレベルで決定される。

この四つのタイプはアスペクトに関わり動詞(V)によって分類するよりも、項を取ることによって動詞類型が変わることからみれば、動詞句(VP)によって分類したほうが適切である[4]。

四、動詞の限界性

Vendler モデルに基づき動詞はまず[±状態性]で状態動詞とほかの動詞と区別して、さらに[±限界性]で限界動詞と非限界動詞にわけた。これに関して上位事象が下位事象の起因になって、完成動詞：＜x ACT (ON y)CONTROL[5]　BECOME y BE AT z＞の式で示すことにしたら、意味述語'BECOME'は事象に終点があると示唆している。完成動詞と到達動詞はそれで活動動詞と違って限界性を有するものとなる。特に完成動詞は動詞自ら限界性があるというより、活動動詞と項と共起してから限界性を持ったといってもよさそうだ。この統語的限界性は北原(1999)が対格目的語と共起した動詞構文に焦点

[4] 活動動詞が対格目的語を取ったら完成動詞に転換することがある。以下この現象につき述べていく。

[5] 影山(1996)が CAUSE の代わりに CONTROL の意味述語を取り入れた。

臺灣大學學術期刊資料庫

を絞った。さらに三原(2002)が句構造で限界構文を説明した。

(一)北原の考察

北原(1999)はヲ格で表示された対格名詞句との共起、限界性と非限界性につき説明しようとして、限界性は限界点を恣意的に設定することができなく、対格名詞句が示す実体の範囲を消費する視点によって設定され、「対格名詞句＋動詞」、「達成量 Q との共起」、「マデ格句との共起」によって、限界動詞と非限界動詞を分析した[6]。次のようにまとめられる。

・対格名詞句+非限界動詞は限界的動詞句であり、

(13)太郎が舗道を{ 30 分／??30 分で}歩いた。

(14)次郎が本を{ 1 時間／?三日で}読んだ。

・対格名詞句+限界動詞は限界的動詞句であり[7]

(15)太郎が｛あの／家宝の古伊万里の｝皿を割った。

(16)花子が｛母の大事にしている｝植木鉢を玄関に入れた。

・特定/定の対格名詞句+期間 Q デ+非限界動詞は限界的動詞句である。

(17)太郎は その舗道を／広瀬通りを｛30 分／30 分で｝歩いた。

(18)次郎が 三郎の買ってきた本/LGB を{3 日間／3 日間で}読んだ。

・対格名詞句＋達成量 Q+限界動詞は限界的動詞句

(19)太郎が｛皿を／皿を 3 枚／｛2 秒で／*2 秒間｝皿を 3 枚[8]｝割った。

(20)太郎が 3 枚の皿を｛* 5 分／2 秒で｝割った。

・対格名詞句＋達成量 Q＋非限界動詞はアスペクト限定するため、限界性を持つ動詞句になる。

(21)太郎は｛*30 分／30 分で｝舗道を 2.5m 歩いた。

(22)太郎は 2.5m の舗道を｛30 分／1.5m 20 分で／30 分で｝歩いた。

---

[6] 以下の例は北原(1999)による。

[7] 事態をはかりとる対格名詞句が存在する動詞句は限界性を変更する要因となる句がほかに存在しなければ限界的動詞句になる(北原 1999:170)。

a. 2 秒で皿をφ割った。

b. 5 枚の皿を 3 枚割った。

臺灣大學學術期刊資料庫

・対格名詞句＋マデ格句＋限界動詞は限界的動詞句である。

(23)太郎が家宝の古伊万里の皿を {20 枚目まで / 20 枚目まで{*?3 分間/3 分で}} 割った。

(24)花子が母の大事にしている植木鉢を {6 個目まで / 6 個目まで{*10 分/10 分で}} 玄関に入れた。

(25) (30 階建ての)ビルを 10 階まで {10 階まで / {*?1 ヶ月間/1 ヶ月で}} 建てた。

(26) (100m の)白線を {20m 地点まで / 20m 地点まで{*?5 分間/5 分で}} 消した。

・対格名詞句＋マデ格句＋非限界動詞は限界的動詞句である。

(27) 太郎は 広瀬通りを {{??東二番丁まで／?終点まで}5 分間 / {東二番丁まで／終点まで}5 分間で／30 分で／東二番丁まで 2km} 歩いた。

北原は達成量を全部達成に限定し、限界点が変更されることがあると付け加えたが、それは活動・行為をアスペクト限定するように解釈すれば途中までででも達成した部分も達成量と見ればよかろうし、動詞句に限界性を有することが変わらない。

北原は限界性の決定について非限界動詞の場合、動詞句の構造という統語的情報が必要であること、そして限界動詞の場合はは動詞レベルで保持していることを察し、そして限界性の決定要因の階層性(ⅰ)限界動詞か、(ⅱ)対格名詞句が特定であるか、(ⅲ)部分を表すマデ句と共起するか、(ⅳ)期間 Q デと共起するか、(ⅴ)達成量 Q と共起するかを論じた。これに対し限界動詞と共起する「部分を表す

a の「皿」と b「5 枚の皿」は集合(set)で、「φ」と 3 枚は達成量。

臺灣大學學術期刊資料庫

マデ句」と「達成量 Q」は部分と全体の関係であり、次の三原の提案で説明できると思う。

(二)三原の考察

三原は Vendler の 4 タイプの動詞を瞬間性で活動動詞と達成動詞・到達動詞を含む過程動詞[9]と区別するが、実際に動詞の変換があって三つに収束したと指摘した。それは(ⅰ)項の存在((28)a,b)；(ⅱ)項の解釈((29)a,b)；(ⅲ)付加詞の存在（(30)b）である。

(28)a.He sang (for hours).(活動)

b.He sang *The International* (in two hours).(達成)

(29)a.He read *The Minimalist Program* for two days.

b.He read *The Minimalist Program* in two days.一次的

(30)a.He pushed the cart (for hours).二次的

b.He pushed the car *to the station* (in 30 minutes).

三原は Tenny(1994)の研究を踏まえて外項はこれに関与しないことと、また外項を持つ他動詞・非能格動詞と非対格動詞はアスペクト限定の統語構造を(31)で示した。

(31) [外項[VP[V'V　直接内項]　間接内項]]

(32)a.白線が消えた。

b.太郎が白線を消した。

c.太郎が泳いだ。

d.太郎が向こう岸まで泳いだ。

e.次郎が故障車を押した。

f.次郎が故障車を修理工場まで押した。

上記の例によれば動詞が限界的な場合、数量詞が名詞句に付加し、動詞が非限界的(atelic)な場合、数量詞は V'に付加することが分かる[10]。

---

[9] 三原はこの分類を中右に倣って process という。

[10] 三原は次の例での斜体字で表した後置詞句を間接内項としそれぞれ統語機能が異なっているとしたが、これは V'の付加詞と見るべきであろう。

a. John melted the ice cube {*with a candle/with a hot coal*} in an hour.

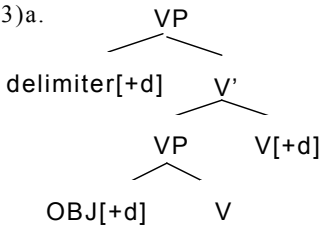
b. Mary built a house {*out of a truckload of adobe/out of adobe*} in a month.

臺灣大學學術期刊資料庫

三原はさらに三つの点につき分析を行った。(i)d(elimited)[11][+限界的]素性を有する直接内項が統語構造の中でどのように実現されるか、(ⅱ)付加限定詞である着点句と、その他の間接内項が統語構造の中でどこに位置づけるか、(ⅲ)そしてアスペクト限定に関与し得るのが直接内項と着点句となる付加限定詞にあるのはなぜか。

三原は VP の上に $VP_{delimiter}$ を設け、主要部は軽動詞 V[+d]であり、直接内項[+d]が素性照合のため $VP_{delimiter}$ の指定部に移動し、これ自体が delimiter となり、OBJ の位置に痕跡 e が残る。

(33)a.



b.[$_{VP}$delimiter OBJ$_i$[+d][$_{V'}$[$_{VP}$ e$_i$ V] V[+d]]]

(34)a.花子が髪を染めたのを見て、昌子は前髪をそうすることにした。

b.太郎は故障車を修理工場まで押した。次郎はバイクを近くのガソリンスタンドまでそうした。

c.太郎は公園で子供を叱った。*次郎は駅前で酔っ払いをそうした。

「そうする」は V'/VP のいずれを置き換えることからみれば、限界動詞句の目的語「前髪」は delimiter のある指定部に移動したことに対して非限界動詞句の場合、delimiter「ガソリンスタンドまで」が付加詞であり、目的語の「バイク」は指定部に移動した。

(35)a.[$_{VP}$delimiter ［前髪 $_i$[+d]][$_{V'}$[$_{VP}$ e$_i$ 染める] V[+d]]][12]

b.[$_{VP}$delimiter バイク[$_{V'}$ガソリンスタンドまで[+d]]

[11] 動詞が意味的に限界性持つ場合は telicity といい、本文ではその共起する名詞句(NP)や範囲をあらわす後置詞句(PP)が持っている限界性は delimitedness とし、動詞の限界性と共起制限があるとする。

[12] または[VPdelimiter [前 i[+d]] [V'[VP[DP 髪 i] 染める] V[+d]]]の可能性がある。

臺灣學術 期刊資料庫

[v'[vp ei 押した] V[+d]]]] [13]

c.[vp 駅前で[v'酔っ払い [v 叱った]]]

(35)の例によれば、VPdelimiterが成り立つにしたがって目的語の移動が起ることが分かる。そして付加限定詞が着点句に限ったことも分かる。

（三）VPdelimiterについて

三原と北原は名詞句の特定性と動詞の境界性は相互関連があるとし、動詞から見れば限界性のある動詞と共起する名詞句は特定性を有すると主張した。これに対して北原が提示した限界性の決定要因の階層性の (iii)部分を表すマデ句と、(v)達成量 Q は別々に提示するし、そして三原が VPdelimiterは動詞が限界性の有無によって構造が違うとした。

ここでまず北原が提起した限界性の決定要因を再考察したい。非限界動詞の場合統語上で決め、多義性ももつ一方、限界動詞の場合は語彙上限界性を持ち、しかも内項名詞句が特定(specific)である。「期間 Q デ」の付加により非限界動詞句の多義性を消し、内項も限定詞か関係節の有無を問わず特定になる。

(36)a.太郎が三時間で本を読んだ。

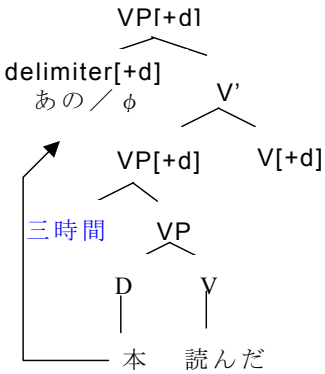
b.太郎が本を読んだ。

(36)a.は一番下の VP は項構造が満足しているが、はっきりと限界性を持つことはなく、[+d]素性を持つ軽動詞の補文に期間を表す「三時間で」が VP と再分析(reanalysis)され限界性を持たせて、下の名詞句も V'の指定部に移動して[+d]素性を照合する。(36)b.の場合では VP ははっきりと限界性をもっていなく、もう一つの解釈は本を読み終わっていないというのも可能であるから、名詞句は元の位置に止まったまま、[+d]の素性照合をしない。樹形図でそれぞれ(37)a.b になる。

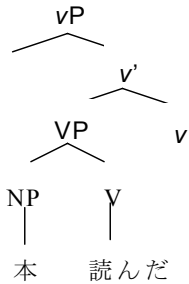
[13] または [VPdelimiter バイク[VPdelimiterガソリンスタンドまで[+d]][V'[Vp ei 押した] V[+d]]]]

臺灣大學學術期刊資料庫

(37)a.

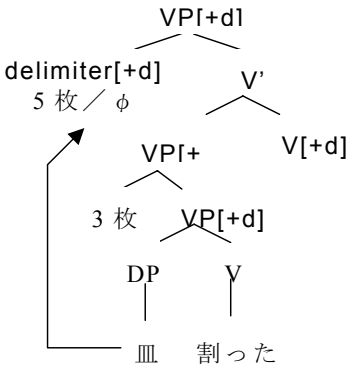


b.



限界動詞の場合、内項が特定であり、達成量は付加詞で、集合と部分の関係を持つ。部分を意味した達成量が付加詞で限界性が変わらない。

(38)



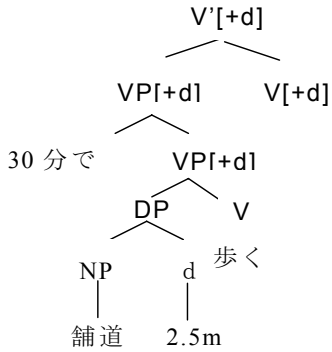
次は達成量 Q との共起現象について考える。非限界動詞の場合多義性を消すには達成量 Q が一番下の VP と再分析され、内項に[+d]素性を持たせると共に達成量 Q_i と名詞句 $_I$ に同一指標を持たせる。相互 c-command する［$_{DP}$NP D］となる。

(39)a.太郎は｛*30 分／30 分で｝舗道を 2.5m 歩いた。
b.太郎は 2.5m の舗道を｛30 分／1.5m 20 分で／30 分で｝

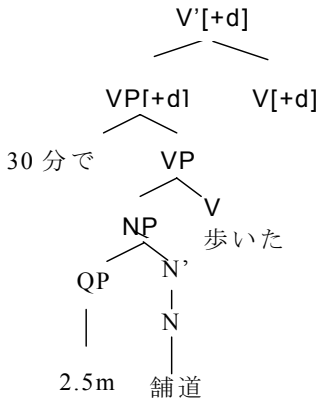
臺灣大學學術期刊資料庫

歩いた。

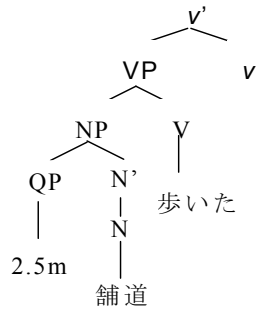
(39)a.



(39)b.



b'



(39)a では期間 Q「30 分で」は限界的動詞句に付加するが、(39)b.「2.5m の舗道」は NP であり、限界性が曖昧で「30 分で」は非限界的動詞句と再分析されて初めて限界的動詞句となる。(39)b'は期間 Q が現れていない構造で、「2.5m」は「舗道」に付加し、NP[-d]であるから素性照合のため VP の音声形態を持っていない[+d]spec へは移動する動機はない。

今まで統語的限界的動詞句を見てきたが、語彙的限界的動詞句との相違を観察してみたい。

(40)太郎が家宝の古伊万里の皿を 20 枚目まで{*?3 分間/3 分

臺灣大學學術期刊資料庫

で}割った。

(41)花子が母の大事にしている植木鉢を 6 個目まで{*10 分/10 分で}玄関に入れた。

(42) (100m の)白線を 20m 地点まで{*?5 分間/5 分で}消した。

(43) (30 階建ての)ビルを 10 階まで{*?１ヶ月間/１ヶ月で}建てた。

限界動詞の場合「客体」(Theme)／「結果」(result)があって、「割る」/「入れる」/「消す」は限界動詞だから、内項が DP であり、達成範囲マデ格が付加詞となる。

「建てる」の項が result の意味役割を持ち、[+d]である DP であり、達成範囲マデ格が付加詞となる。その構造は（38）の類に属す。

非限界動詞の場合名詞句が特定・非特定に両方解釈できるので、限界性を明らかにさせるにはマデ格句が merge して、そして期間 Q デを付加する。または特定的 DP に解釈し、「5 分間で」を付加する。ここでは「舗道」NP／DP を例にして、NP の場合マデ格句が merge して、期間 Q デを付加する。DP の場合、期間 Q デを付加する。すなわち期間 Q デは非限界動詞句でも限界動詞句でも VP 外に付加する構成素で、範囲を表す数量詞は非限界動詞句では NP と相互 c-command して、特定性を持つ DP となり、マデ格は一番下の VP と再分析が起こり、VP[+d]になる。

（四）内項の分析

三原の説に北原の挙げた例を照らし合わせてみれば、非限界動詞の活動動詞と名詞句は以下の条件で完成動詞に転換することが分かる。(ⅰ)項限定詞、即ち対格に特定的名詞句が起きる場合(ⅱ)付加限定詞、即ち移動動詞句に終点か距離数量詞や回数数量詞が現れる場合。三原はアスペクト限定の統語構造を(31) [外項[vP[v'V　直接内項]　間接内項]]の式で表そうとして、直接内項の　[±d]によって指定部の delimiter に内項[+d]が移動し、または付加限定詞が delimiter に起き、さらに投射する句の指定部に内項が移動するとした。しか

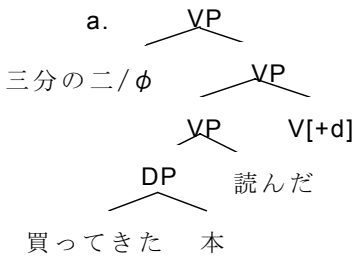
臺灣大學學術期刊資料庫

し範囲をあらわす数量詞とマデ格の位置の相違は見られない。句構造からみれば、期間Qデは間接内項を取った後の VP 外に、範囲マデ格は限界動詞句では直接内項を取った V'に付加し、部分的達成量を表すが、非限界動詞句では直接内項を取った動詞句と再分析し VP[+d]となる。数量詞は限界動詞句の付加詞で部分的達成量を表すが、非限界動詞句では直接内項 NP と相互 c-command し、同一指標を持って、merge して DP となる。つまり限界動詞句の対格に生じる名詞句は意味役割「結果」(Re) (例えば(25)の「ビル」)や特定的名詞句((18)の「三郎の買ってきた本／LGB」)の場合音声が持たない限定詞「φ」か「三郎の買ってきた」が現れ、名詞句自体が限界性を持つ[DP[delimiterP[NP]]]である一方非限界動詞句の目的語は不特定な(generic)名詞句 NP である。

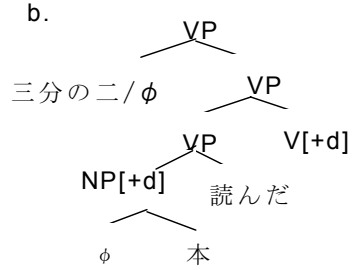
(44)太郎が{φ 買ってきた本／φ 本}を 三分の二 読んだ。

(45)

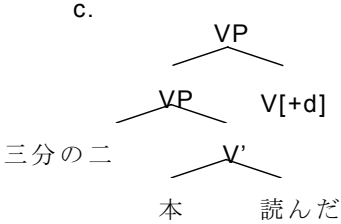
a.



b.



c.



一方、活動動詞句に関して「泳ぐ」、「押す」の対格名詞句は範囲を表わさないため、NP であり、「歩く」、「走る」の対格に経路(Path)や客体(Th)が現れる場合、DP か NP のいずれに解釈してもいい。

(46)a.太郎が向こう岸まで泳いだ。

臺灣大學學術期刊資料庫

b.次郎が故障車を修理工場まで押した。

(47) 太郎は広瀬通りを{??東二番丁まで／?終点まで}5 分間
{東二番丁まで／終点まで}5 分間で／30 分で
／東二番丁まで 2km
歩いた。

(48)a. 太郎は｛*30 分／30 分で｝舗道を 2.5m 歩いた。

b. 太郎は 2.5m の舗道を｛30 分／1.5m 20 分で／30 分で｝歩いた。

五、結び

対格を付与される内項についての特定性は 4.4 で述べたが、範囲を表わすには回数を表す数量詞もある。三者の間順位があることは、次の例に窺える。

(49)a.太郎が(15 分で)広瀬通りを歩いた。

b.太郎は広瀬通りを{一番町まで／2km／二回}歩いた。

c.太郎は広瀬通りを一番町まで{2km／二回}歩いた。

d.*太郎は広瀬通りを 2km 二回歩いた。

f.*太郎は広瀬通りを一番町まで 2km 二回歩いた。

g.太郎はその 5km の歩道を二回歩いた。

h.*太郎はその二回の歩道を 5km 歩いた。

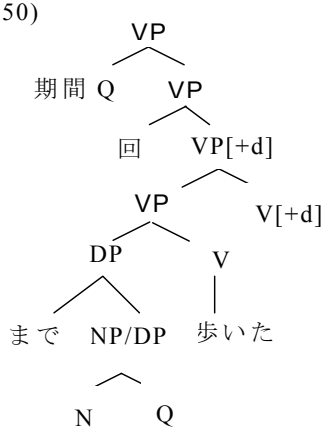
即ち、49(b)のように「広瀬通り」は[+d]の場合、終点も距離も回数も VP に付加する限定詞となり、(c)「広瀬通り」は[-d]の場合、終点が動詞句と merge する。距離や回数のいずれは VP[+d]に付加し、しかも相互補完の現象を示した。

そして両方とも現れる場合、距離数量詞が名詞と merge して DP となり、回数数量詞はそれが許されないことが明らかである。それぞれの生起する位置[14]は次の通りである。

[14] 一番下の VP 内にある距離数量詞が NP に付加する場合、上の NP に投射され、NP と相互 c-command する場合上へ DP に投射される。

臺灣大學學術期刊資料庫

(50)



本文は動詞句の限界性に関して北原の分析を踏まえ、三原によって展開された項限定詞、付加限定詞の説に基づき、限定詞の位置の説明を図った。(50)で示されるように限定詞それぞれ生起の位置は NP に近い位置から、VP の領域に入る位置へとのように考えれば一理があると思う。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

影山太郎(1993)《文法と語形成》東京、ひつじ書房, 43-52, 60-62

－－－(1996) 《動詞意味論》東京、くろしお出版

北原博雄(1999)(日本語における動詞句の限界性と決定要因) 黒田成幸。中村捷編《日本語と英語の間のことばの核と周縁》東京、くろしお出版所収, 163-199

久野暲(1991) 《新日本語文法研究　四版》東京、大修館書店, 79-89

－－(1994)《日本語文法研究　十六版》東京、大修館書店, 193-219

薛芸如(1991)《日本語の複合動詞について》東呉大学修士論文

－－(2001) ＜助詞「に」に関するいくつかの考察＞《東呉日本語教育》No.24,49-63

湯廷池(1999)＜外国人のための日本語文法：日本語助詞の下位分類とハイアラーキー＞《人文社会学報》Vol.1, No.2 元智大学

－－(2003)＜漢語的動後成分：結構與功能＞ms.東呉大学日本文化研究所

中村捷等(2000) 《ことばの仕組みを探る》東京、研究社,121-127

－－－(2001) 《生成文法の新展開》東京、研究社

長谷川信子(1999)《生成日本語学入門》東京、大修館書店

三原健一(2002)＜動詞類型とアスペクト限定＞《日本語文法》Vol.2, No.1

Vendler (1967) *Linguistics in Philosophy* ,Cornell University Press, New York.

臺灣大學學術期刊資料庫